早稲田大学大学院文学研究科紀要 第69輯（2024年3月）
Bulletin of the Graduate School of Letters, Arts and Sciences of Waseda University Vol.69 (Mar.2024)

優秀修士論文概要

# 流れ去る父、輪に休らう母、まだ見えない子

## ――ヘルマン・ブロッホ『魅惑』における「わたし」とギッソンの共闘について――

隣　　健斗

本論文では1936年に脱稿されたヘルマン・ブロッホの小説『魅惑（Die Verzauberung）』(1)を分析する。物語は、舞台となるクプロン村にやってきた放浪者マリウスと、村の老婆ギッソンとの思想的な対立を基に展開される。語り手である「わたし」は、ギッソンの思想に共鳴しながらマリウスに魅惑されもする。本論文はこの対立構造を軸に、『魅惑』における「わたし」とギッソンの思想的な共闘が、どのようにマリウスの思想を克服するのかという観点から書かれた。

ブロッホは自身の小説に注釈を施し、説明を加えることを好んだ。1941年の「魅惑」と題された解説では、「この小説で私が試みたのは、ドイツの出来事をその魔術的で神話的な全背景を用いて、その群衆妄想的衝動を用いて、［中略］暴くことだった」とある。出版者ダニエル・ブローディ宛ての1936年１月16日の書簡にも、この小説は「最初の宗教的小説」であり、宗教性が「大地母崇拝に結び付く限りで、この第一稿は正しいもの」だと述べる。こうした作家自身の注釈に触発され、これまでの研究は以下のような二つの方向性を持った。

一。同時代現象と結びつける研究。ナチ現象との関係において論じる研究が多い中、特筆すべき論文は、パウル・ミヒャエル・リュツェラー「政治的小説としてのヘルマン・ブロッホの『魅惑』」（1977）(2)だ。マリウスをデマゴーグとして分析し、ヒトラーを重ねながら、作品人物の信念や行動に1930年代のドイツにおける様々な主義主張や社会的立場を読み解く。そして主義主張が乱立する作品空間において、当時のドイツのポジショントークに当てはまらないギッソンの思想に、ファシズムに陥らないためにブロッホが必要としたものを見いだした。

二。大地母神の神話と結びつける研究。この研究は、女神デメーターを小説の題名に付そうとしていた事実、ブロッホの読書履歴――バッハオーフェン『母権論』（1861）、クラーゲス『心情の敵対者としての精神』（1932）第74章「大地母神」を執筆の準備に読んでいた――などを根拠にし、ギッソンを大地母神と見立て、物語を大地母神の神話に則り解釈する。例えばミヒャエル・ヴィンクラーは「ヘルマン・ブロッホの小説『誘惑者』における諸物語の機能」（1968）(3)で、デメーター、コレー、ハデスの神話を参照する。ハデスがデメーターの娘コレーを冥界に誘拐し、冬にだけ帰還するコレーとともに春が訪れるという神話に、ギッソンの孫娘であり、マリウスが起こす殺人劇の被害者となるイルムガルトが、小説の結末に幽霊として帰還することを重ねる。その上でマリウスとナチを一致させ、マリウスが

（1） Hermann Broch, *Die Verzauberung*. Frankfurt a. M. 1994. 以下、この著作を VZ と略記する。
（2） Paul Michael Lützeler, «Hermann Brochs Die Verzauberung als politischer Roman», Neophilologus LXI (Januar 1977), S.111-126.
（3） Michael Winkler, Die Funktion der Erzählungen in Hermann Brochs Roman Der Versucher, Hermann Broch. Perspektiven der Forschung. Hrsg. von Manfred Durzak. München

春の到来には必要悪であるから、ナチを政治的経過に不可避の事象とする。

一方で、母権制に比重を置く研究もある。リュツェラーは先行研究の整理を行った「ヘルマン・ブロッホの小説『魅惑』――研究についての叙述、批評、補足」(1983)[4]で、『魅惑』におけるバッハオーフェンやクラーゲスの重要性は指摘されているが、彼らの母権制思想とギッソンの間にある類似や差異は明らかにされていないとし、クラーゲスと『魅惑』を比較する。

以上、一。同時代現象と結びつける研究、二。大地母神の神話と結びつける研究を見てきた。次に本論文を先行研究の中に位置づけたい。本論は四章構成である。各章の概要を示しながら、適宜先行研究との違いについて触れていく。

## 第一章:「価値の崩壊」と「全体性認識」

本章では、ブロッホの問題設定の前提である「価値の崩壊」状態の内実を明らかにし、それに直面した文学の役割を理解した。ブロッホの「価値の崩壊」とは、中世のキリスト教世界が中世の終わりと共に崩壊した状況を指す。キリスト教は、中世の人びとが自らの言動や論理の正しさを確信するための基盤であり、絶対的な一価値領域だった。それが喪失し、自らの論理の正しさを主張する様々な価値領域が台頭し、正しさが相対化する中で、人びとは自らの言動や論理を確信できなくなる時代の幕が開けた。

この時代に文学という一価値領域がすべきことは何か。それは論文「ジェイムズ・ジョイスと現代」(1936)と論文「トーマス・マンの神話と文学」(1935)を扱う中で、「全体性を捉える認識」[5]だと明らかになった。「全体性」とは時代の全体性を指すが、諸価値領域が並立する「価値の崩壊」において、何らかの価値領域にそれぞれ属する人間に、時代の全体性を掴むことは難しい。そこでブロッホが提起する概念は、いかなる価値領域にも拘束されない精神主体と、その精神主体が論理を進展する「認識」[6]である。文学作品において、作家は自らの論理を基に認識を行う。これだけでは他の価値領域と同じだが、文学の認識は「人間性」[7]を含む点で異なる。そして「人間性」を含める「認識」を行う文学の方法論として、ビルドゥングの形式が求められる。

第二章から、ブロッホの文学論が顕著に表れているものとして『魅惑』を分析した。そこでは「認識」と「人間性」が何によって担われているかが論点になった。本論は、リュツェラーが『魅惑』を諸価値領域が乱立し鬩ぎあう時空と見なしたのにならいつつ、主に「わたし」、ギッソン、マリウスが属する価値領域を分析しながら、リュツェラーがこの三者にみた特性を発展し、修正していった。

## 第二章:父的なものの価値領域

本章では認識が何によって担われるかを確認した。そのために「わたし」を論点とし、「わたし」を

---

(4) Paul Michael Lützeler, «Hermann Brochs Roman *Die Verzauberung* — Darstellung der Forschung, Kritik, Ergänzendes», *Brochs › Verzauberung ‹* Hrsg. von Paul Michael Lützler. Frankfurt a. M. 1983. S.239-296.

(5) Hermann Broch, «James Joyce und die Gegenwart Rede zu Joyces 50. Geburtstag», *Hermann Broch Kommentierte Werkausgabe Band 9/1*. Hrsg. von Paul Michael Lützeler. Frankfurt a. M. 1974-81. S.63-94, hier S.85.

(6) Broch, VZ, S.83.

(7) Hermann Broch, «Mythos und Dichtung bei Thomas Mann», *Hermann Broch Kommentierte Werkausgabe Band 9/1*. Hrsg. von Paul Michael Lützeler. Frankfurt a. M. 1974-81. S.30-31, hier S.30.

医者と認識者としての二側面から論じる。それにより、「わたし」が属する価値領域を理解し、その上で「わたし」が「全体性を捉える認識」のために努力する認識者であり、「わたし」が「認識」を担っていることを示した。次に、「わたし」との関係におけるマリウスを論じた。『魅惑』という小説において、魅惑者として設定されたマリウスは、「わたし」の行う認識に対し、どのような脅威であるかが焦点となる。

## 第三章：母的なものの価値領域

本章では人間性を担うものが何かを理解することに努めた。論じるのはギッソンだ。先行研究でギッソンは大地母神や母的なものとの関連において論じられてきたが、筆者もこれに従った。しかしギッソンを神話的人物として論じることはしなかった。こうした研究は小説を何らかの神話の物語に押しこみ、どの神話が最も適しているのかという論点に終始し、小説自体の解釈から離れていきがちだからだ。また、特にデメーター、ペルセポネ、ハデスの神話で小説を捉えると、マリウスを肯定的に捉える余地を残す。筆者が取った道は、ギッソンを「母的なものの価値領域」の中で振舞う人物として提起することだ。制度、社会のレベルでギッソンを論じるために主にバッハオーフェンの「母権制序説」を参照した。母権制との比較でギッソンの価値を理解することによって彼女が、「人間性」を担うことが確認できた。

その後、円環という象徴を取り上げた。円は内側に「わたし」とギッソンを含み、外側にマリウスを除外する線を引く、「わたし」とギッソンの共闘を強調するものだ。この円の内側で「わたし」が使う、故郷に戻ってきた、という表現に注目し、この小説をビルドゥングの形式に則っているものとして読み直すことができた。母的な価値に属する円環において「認識」が故郷に気づくという点に、「認識」は「人間性」の助けがあって「全体性を捉える認識」を求めることが可能だと結論づけることができた。

## 第四章：「生の流れ」

ここまでで「認識」は「わたし」が担い、「人間性」はギッソンが担うと理解され、二人の共闘が全体性認識に繋がると明らかになった。第四章では、彼らの共闘が、遥かな過去から未来にかけて生まれてくる人間の織り成す「生の流れ」(8)を擁護するものであることを論じた。人間という種が続く「生の流れ」が更新されるには、生物学的繁殖だけでは十分ではない、というピエール・ルジャンドルの思想を参照し、論理を前提とする社会で人間が生きるために、社会がいかに人間を、言葉を話し、論理を扱える動物にするかの分析を進めた。

ルジャンドルを経由することで、「生の流れ」を擁護する「わたし」とギッソンが、論理構築を擁護する二人だと分析することができた。マリウスは、イルムガルトの犠牲に際して無茶な論理に基づいており、彼の論理構築の破綻が示された。最後に、「生の流れ」に逆らうイルムガルトの死と、「生の流れ」を体現する村娘アガーテの出産を対置し、後者に、「認識」と「人間性」の共闘が役割を果たしていることを確認して本論を終えた。

---

（8） Broch, VZ, S.122.